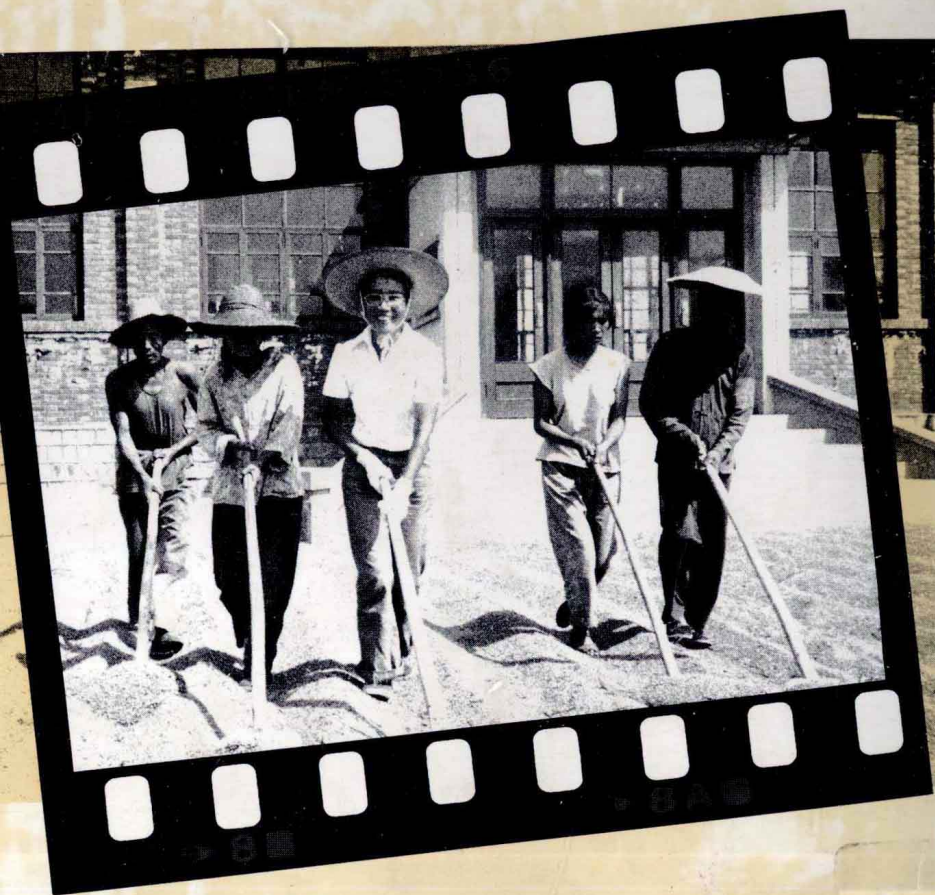


有吉佐和子の 中国レポート



新潮社版

宮佐和子の

国レポート

新潮社版



有吉佐和子の中国レポート

昭和五十四年三月五日発行
昭和五十四年八月十五日八刷

定価 八〇〇円

著者 有吉佐和子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71
電話 業務部 03(286)5111
編集部 03(286)5411
振替東京四一八〇八番

印刷 凸版印刷株式会社
製本 大口製本株式会社

© by Sawako Ariyoshi, 1979 Printed in Japan

凡丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

有吉佐和子の中国レポート ■ 目次

謎だらけの国	7
特ダネ郭沫若の死	17
周揚に会う	25
老舎の死について	34
北京の料理屋	42
建明人民公社へ	52
西舗大隊にて	63
沙石峪の水	91
沙石峪の土	100
地主の家族に会う	109
遵化県皇城にて	119
唐少年驚く	128
通訳の風邪が癒った!	

后牧生産大隊にて	145
監視労働の地主に会う	154
大連より瀋陽へ	163
五三人民公社にて	172
「イエス」と答えた青白い顔	181
広州へ	190
花東県人民公社	198
花の蘇州は熱烈歓迎	207
花咲爺さん萬々歳	216
蘇州で感じたこと	225
上海の作家たち	234
周西人民公社にて	243

有吉佐和子の中国レポート

謎だらけの国

一九七八年六月十二日。

五度目の中国であった。

北京空港に降り立った私は、さわやかな日射しを浴びながら足音も軽く空港待合口に向って歩いていった。遠くに人々が立ち、手を振っていたが、日航七八五便は満員だったし、団体さんも多いようだったから、昔のように、私だけを待っている人々でないことは確かだった。昔というのは、日本と中国が国交回復をする前のことである。第一回目は一九六一年、あれから十七年になる。それから翌年、そして六五年には半年北京に滞在した私は、その度に中国が首たてて変貌していくのを見ていた。だが六六年八月の文化大革命以来、中国は私にとって閉ざされた国に見えた。七四年、初めて飛行機が羽田から大阪、上海を経由して北京に飛んだとき、私は中国民航のゲストとして招待された。その光栄には浴すべきだと思ひ、出かけはしたものの、老

舎先生はすでに亡く、親しい人々は殆ど消息不明で、顔見知りの人々に何を訊いても「知りません」「僕らもよく分らないのです」と、ありあり苦悩の色が見えた。二週間の招待であったにもかかわらず私が四日間て帰ってきてしまったのは、中国人の苦しみ方が胸に痛くていたたまれなかったからであった。

だが、今度は違ふ。

一九六五年に失脚した田漢、呉晗、周揚の名誉が回復された。文革以来、行方も知れなかつた上海の巴金が帰ってきた。劉白羽も帰ってきている。夏衍先生も復帰した。それらの朗報は私の胸を高鳴らせていた。みんな無事だったのだ！ 生きていたのだ。あの嵐の中で、とにかく死なずに頑張っていたのだ。

空港の迎えには誰が来てくれているだろう。劉白羽、林林、李季、嚴文井、彼らの中の何人があの巨大な空港ビルで私を待つて下さっているのだろうか。私は乱視で眼鏡をかけているが、レンズには潜伏性斜視を矯正するプリズムが入っているので遠くがはっきり見えなないのだ。断じて年齢のせいとは思いたくないので、私は急ぎ足になった。

一番先に、孫平化氏の顔が見えた。わつと思つたら、手が上がった。孫先生も手を上げている。私は駈け足になつた。「お久しぶりでございます。お出迎えを恐れ入ります。

この度は、どうぞよろしく」

握手しながら、私は大声で早口で挨拶した。対外友好協会の常務理事である孫平化氏は、何十年も昔に東京工大へ留学しているから日本語、ペラペラなのである。だが孫平化氏の様子は少しおかしかった。

「やあ、いらっしやい。灼けましたねえ」

「ええ、ヨーロッパに行っていたのです。地中海の島めぐりをしていましたから」

「アフリカの人かと思ったのですよ。しかし近づいたら分りました。お元気で何よりです。本当にいい顔色になりましたねえ」

しかし孫平化氏の方は、顔色がよくなかった。どこかに持病があるのかしらと咄嗟に思った。

「友協の唐家璇です。よくいらっしやいました」

見覚えのある青年と握手。

通訳の周徳林さんが、すぐ私のパスポートと切符を受取り、荷物を取って来る間、待っていて下さいと言う。

「張光珮と申します。御滞在中、ずっとお伴をさせて頂きます」

小柄の女性が挨拶した。中国人から、こういう丁寧語で挨拶されたことがないから、少々驚いた。唐家璇が、彼女は北京大学の日本語講師だと紹介した。

「待合室へ行きましょう」

もう一人出迎えてくれていた人がいた。読売の丹藤特派員だった。私が中国の人民公社に入るといのでルポを書けと追いかけてまわっていた新聞社からは、誰も出迎えていないのが面白かった。読売新聞は、日本ではウンともスンとも言わなかった。もちろん丹藤記者は初対面である。なるほど、こういう手もあるのかと私は感心した。しかし警戒する必要はあった。私が紀行文を書くところは新潮社で、もう約束して出てきたのだ。もちろん、書くか書かないかは、中国に行つて判断した上でという約束だった。過去四回、私は中国に来て、帰つて紀行文を書いたことがなかった。理由はその都度違つていたが、いわば書きようがなかったからだと言つていい。この巨大な国土と、九億余の人口を抱えている中国を、一度や二度の旅行で理解出来る筈がなかったし、その他にも事情があった。しかし今度は違つた筈だと、私は出発の前から思つていた。

空港ビルの休憩室は広くて、僅かな人々があちこちに散在して坐っていた。周徳林はパスポートを持ったまま荷物の受取りをしているのだろう。なかなか姿を見せなかった。孫平化、唐家璇、張光珮、それと日本人では丹藤記者。私を出迎えたのは、たったこれだけか。変だ、と私は思った。

丹藤さんは兎もかく、中国側が、孫平化氏と対外友好協合理事が一人と、通訳二人だけということは想像もしていなかった。

「有吉さんは、今度、中国で何がしたいですか」

運ばれてきた冷たいジュースを飲みながら、孫先生が訊く。私は半分呆れながらも、この質問には答えなければならなかった。

「人民公社に泊りこんで、農村の人たちと一緒に暮すのが目的です」

「農村は条件が悪いですよ」

「悪い条件って、なんのことでしょう」

「どこの農村にも風呂場がないですよ。日本人は風呂が好きでしょう。毎日入らないと気がすまないでしょう。とても農村では暮せませんよ」

「私は普通の日本人と違うのかもしれないね。毎日お風呂に入る習慣がありません。一カ月や二カ月入浴できなくても平気です。孫平化先生、垢で人間は死にませんよ」

「しかしですええ、他の条件も悪いですよ」

「具体的に言ってみなさい」

「農村は衛生的に問題があります」

「どうしてですか」

「豚とか牛とか沢山いますからね、穢いんです。臭いです」

「家畜が農村にいるのは当たり前ですよ。家畜が排出するのは、畑に必要な肥料ですからね。毛主席が、豚は肥料工場だと書いていらっしやるでしょう？」

「しかし衛生的じゃないですよ。それにもう一つ大きな問題がありますよ」

「何ですか」

「便所が、都会とは大変違います」

「当り前じゃありませんか。人糞尿というのは上等の肥料なんですから、水洗で流して捨ててしまふ農民がいたら馬鹿ですよ」

私が一つ一つ論破するものだから、孫先生は閉口しながら扇をバタバタ鳴らし、外を見ている。私の顔を見ない。

「それで、有吉さんは、どういう人民公社に行きたいですか」

私は本当に呆れ果てた。私は蘇州の人民公社に入ることになっていた。その他にも河北省に二つぐらいの人民公社が私の受入れをする手筈になっていた。そういうことは北京と東京にある日中文化交流協会で、事務的に話し合いますましてあった。私は今日すぐにでも人民公社へ直行するものと思っていたのに、孫平化氏は、まったく気のない表情でこんなことを訊くのである。

私は、しかし熱意をこめて、纏々説明をした。人民公社

に入る許可を私がもらったのは一九六五年、北京に半年滞在中の事であったこと。その件は一九七四年に来たとき、約束が消えてしまっていないか確かめてあることも言った。「廖承志先生は、どうしていらっしやいますか」

「ベトナムからの難民受入れのために広州へ行っています」

「それは日本でもニュースに出たから知っています。しかし、随分長く広州にいらっしやるものですね。私は、今日これからでも広州に行きますよ。廖承志先生なら、まさか人民公社は条件が悪いなどと仰言らないでしょう。私が今回こちらへ来たのは、廖承志先生のご配慮もあつた上でしょう？」

「もちろん、そうです。しかし、廖さんはすぐ北京に帰ります。ここは中国、急がないで下さい。北京では古い友人がみんな有吉さんを待っていますからね」

そこへ作家の謝冰、心女史が入ってきた。私たちは何年ぶりかで手を取りあい、再会を喜びあつた。日中国交回復後、廖承志先生を団長とする代表団が訪日したのは一九七三年。そのときのメモバリーに謝冰心は入っていた。しかし、それは文化大革命の最中であり、廖先生以外の知人は誰もよそよそしかった。謝冰心先生はアメリカで教育を受け、美しい英語を綺麗な声で、表情豊かに話す方であつたが、

このときは通訳を通して私と話し、決して英語で話しかけても、英語で返事を返さなかつた。

が、今度は違つていた。彼女は両手をひろげて私を抱きかかえ、英語で歓迎の言葉を並べたててくれたのである。明らかに中国は変つた。が、しかし、待てよ、と私は考えこんだ。

謝冰心女史が私を出迎えるのに、遅れて来たというのは、何故だろう。飛行機は十五分も遅れて到着したというのに。だから、と私は又しても思った。かつて出迎えの人々が遅れたというのは見たことがなかつた。雨の中でも、炎天下でも、彼らは整列して出迎えてくれ、こちらが恐縮し、どうしていいのかわからないほど、偉い方々が、さして偉くもない私のような作家の送迎を礼儀正しくして下さつていた。

謝冰心が遅れて来たというのはどうしてだろう。彼女は英語で、

「ご免なさいね、車が混んでいたものだから、時間がかかつてしまったのよ」

と私に言つたが、この釈明も変なものだつた。東京やニューヨークなら容易に通る口実だが、中国で、交通量が多くて車が遅れてしまうことなど、ある筈がない。本当に変だ、と私は思った。

孫平化と謝冰心が、声をひそめて会話を交わしている。私がじつと見ているのに気がつくど、彼らはただちに話をやめ、私の方に向き直り、謝冰心はニコニコし、孫平化は日本語になって、

「ところで有吉さんは、人民公社で何がやりたいですか」
などというのだ。

私は啞然とした。茫然としてしまった。それはたった今まで、私が口を酸くして述べたてていたことではなかったか。

仕方がないから、私は、また一から始めて説明した。通訳の張光珮さんが、私の言っていることを中国語にして謝冰心女史に聞かせているが、日本語で聞いている孫平化さえ、視線が定まらず、

「ああ、そうですか、ははあ」

などと相槌を打っていて、まるで上の空なのである。謝冰心先生の様子も、熱心に通訳の言葉を聞いているとは思えなかった。変だなあ、変だなあ、と思いつつ、私は何度も孫平化の同じ質問に答えなければならなかった。

「ともかく話は明日の朝、お部屋へ伺いますから、そのとき詳しくしましょう。今日は疲れをとるために北京飯店で休んで下さい」

「少しも疲れていませんよ。大阪から三時間で着いたので

すからね。運動不足になる方が心配ですから、北京飯店に着いたら王府井（北京の繁華街）をランニングしたいと思つています」

「ランニング？ 走ることでですか？」

「ええ、マラソンとも言いますが」

「王府井などであなたがマラソンしたら黒山の人だかりになりますよ。第一、王府井は人が多すぎる。走れませんよ」

「それじゃ天安門の方向へ走りましょうか。往復で三十分ぐらいあるんじゃないかしら」

「自動車危険ですよ。そんなこと困りますよ」

「車道を走ったりしませんよ。交通信号を守って、歩道を走るだけですよ」

「それでも人だかりがしますよ、有吉さん」

「ドレスや海水着で走ると言ってるんじゃないよ。ちゃんとランニング・ウェアを着ます。地味な服装を用意しているんです」

「いや、危険です。自動車が多いですから、もしものことがあったら、僕ら廖承志先生に対して責任がありますからともかく今日一日だけでも温和しくしてして下さい。夜は六時半から夏衍先生の招待晚餐会があります。それまで一休みして下さい」

ランニングに関する押し問答は、ここに書くよりもっと長々しいものだった。何しろ私が元氣そうなのは見かけ倒しであって、本質は病弱だということを中国の人たちはもうとつくに知っていたから、私が去年の十一月から一念発起してランニングや床運動を連日続けて健康をようやく恢復した話など、孫平化先生にはなかなか呑みこめなかったのだ。

荷物はもう自動車にのせたと行って周徳林さんが迎えに来た。

「マラソン？」

彼も大いに驚き、

「それなら僕が明日の朝、一緒に走りますよ」

と言ってかれて、この一件は落着いた。

車の後部座席に私と通訳の張さんが乗り、前の助手席に唐家璇が乗った。孫平化先生は空港に残って、次にどこからか飛んでくる飛行機を待ち、社会党の議員一行を迎えるのだという。

張さんは溫和しい人で、ホテルに着くまでの車中は唐さんと私の二人が喋り続けた。どこかで見た顔と思った唐さんは、一九六五年に私が半年北京に滞在していた時期、何か通訳をしたことがあると言った。

「ああ、カトリック教会で。あのとき通訳した少年があな

ただだったの！」

「少年ではなかったですよ。もう北京大学毕业して何年かたっていましたから」

「でも私の前では少年にしか見えなかった」

「今は中年です」

「今でも少年としか思えないけど、あれから十三年たっているのねえ」

「僕は訪日団の通訳として、何度かその間にお目にかかっていましたけど」

「ああ、そうかもしれない。でも、北京天主教会で会ったときの印象は忘れてないけど、あなたがあの少年だというのが結びついたのは今が初めてよ」

「僕もあのときのこと、やはりはっきり覚えています。あの種のカトリック教徒は除名されたと僕が訳したとき、そういうときは破門というのだと御注意を頂きました」

あのときはまだ未熟な通訳にすぎなかった少年が、十三年の歳月を経て、今や対外友好協会の理事となつて流暢な日本語で私と話をしているのかと思うと私は言葉を失ってしまう。きっと私の方は最初から「困ったおばさん」という印象を彼に植えつけていただろうから。そして先刻の孫平化氏とのやりとりを黙って聞いていた彼は、心の中でまた「困ったおばさん」がやって来たと思つているに違いな

い。

なにしろ中国が私の小説を翻訳して出版したのは一九六二年、私が二度目に訪中したときだった。「お着きになるの間に合うようにと急いで刷りました」と、褒めてもらいたそうな顔をして差出された翻訳本を見て、私は狼狽した。ジュネーヴ条約に加盟している国では出版物の著作権は重要な役目を持っている。翻訳も出版も、あらかじめ原著者の認可を必要としている。そのとき交わされる契約書には必ず著作権使用料として本代の何パーセントを支払うという項目が明記されることになっている。ところが社会主義国の中で北朝鮮と中国はジュネーヴ条約に今もって加入していない。無断で翻訳して印税の支払いをしない。一九七三年に条約に加入したソ連でも私の小説は幾つか翻訳が出てゐるらしいのだが、「あなたの本は出版され、あなたのルールはわが国にある」という不思議な手紙が一度だけ届いたことがある。どの小説が、誰の手によって訳され、どれだけの部数が発行されたのか、まるで分らない。

中国の場合も、似たようなものだ。中国の作家たちは印税というものを知らないのだろうか。書いた字数で計算された原稿料を受取るが、別に月給があるので、それ以外の収入は国家に返上するのだという話を聞いたことがある。逆に、日本でも毛沢東選集を出版する場合は、無断で、印

税も支払わずにすむというわけである。

私は別に、私の出版物の印税にこだわっているわけではない。むしろ外国で私の作品が翻訳され、外国人に読まれるなどというのは僥倖だと思つてゐる。

だが中国に招待される日本人の多くが、極端に怯えて、恐縮の固りになり、支那語とか支那料理などという古い言葉で中国人の人々の感情を傷つけてはならないと、頭の中でお経を唱えているような有様を見てみると、私はこんな情けない日本人には決してなるまいと決意してしまうのだ。私は印税をもらつてない。だから、その分は使わしてもらうのだと人々に言い放つてきた。

一九六一年、最初の訪中のとき「なるべく地味なものを着るように心がけて下さい」と先輩の日本人に言われて、「何を」と思った。私は日本人だ。日本人として、私の好みのものを着ることに干渉なんかして貰いたくない。私は反撥し、バカツ派手なものばかりスーツケースに詰めこんで出かけた。周恩来総理が、私の華麗な訪問着姿に、どんなに関心を示したかは、今でも私の自慢話である。

話はわき道にそれたが、車はまっすぐ緑の繁る並木道をひた走り、前来た時にはなかった立体交差の道路を越えて、北京飯店の前に到着した。唐さんと張さんは私を九階の四

四号室まで案内し、

「夏衍先生の宴会は、このホテルの二階で、六時半からです。六時十五分にお迎えに参ります。ごゆっくりお休み下さい。」

と丁寧に挨拶して行ってしまった。

時計の針はまだ四時半にもなっていないかった。やることは何もなかった。冷房のきいた室内で、スーツケースを開け、今夜は何を着るかきめてしまうと、私はベッドの上に寝転び、考えこんだ。

どうしても変だ。空港での孫平化の顔色といい、遅れてきた謝冰心といい、謎めいている。これはどうも、また何かオツ始まるころではないだろうか。廖承志の失脚か——まさかと思っても、この国では、まさかということがよく起る国なのだ。

まさか毛沢東の奥さんが四人組の一人となって、全中国に猛威を振うことなどあるものかと一九六一年には誰でも思っていた。

文化大革命が始まったときの、あの騒ぎを予想した中国問題専門家は一人もなかった。そして、あの騒動を絶讃し、太鼓を叩いて称揚していた日本人たちが、今はケロリとした顔で、四人組を打倒した華国鋒主席の勇断を同じ口で褒めたたえている。

この国は、カードは総て伏せられている神経衰弱というゲームとよく似ている。誰がハートの王様か、誰がダイヤのジャックか皆目分らないのだ。今や江青がスベードの女王だったことは明らかにされた。しかし、まだそれだけなのだ。

廖承志先生が、ベトナムから迫り出された中国難民救済のため広州におもむき、自ら陣頭指揮に当たっているという報道は、それだけなら彼が全世界の華僑事務委員会の主任という立場上当然のニュースとして受取れるが、半月たっても北京に帰っていないというのは、共産党のナンバー23という地位にある彼を考えれば謎である。彼には、他にも北京でしなければならぬ仕事や、会わねばならない外国人が沢山ある筈だったから。

孫平化氏が私に、まるで毫碌したように同じ質問を繰返したことや、遅れてきた謝冰心女史と小声で何事か話しかっていたことが、私には払っても払っても消えない月影の雲になった。何かがきつと起っているのだ、何かが。

六時に私は着替え、髪にブラシをかけ、ちよつと口紅をさした。夏衍先生が歓迎レセプションを催して下さるなんて光栄なことは、日本を出るときは想像もしていなかった。一九六一年に初めて、お会いしたとき、「君、支那料理、好きですか?」と堂々たる昔の日本語で話しかけられたの